合併したのは昭和35年８月１日のこと。つまりそれから50年目の記念の年が今年で、それにふさわしい郷土出身の画家として、渡部利之氏が選ばれたのである。渡部氏はその昔住んでいた故郷への懐かしく想うこころが押えがたく、その後30歳頃から、「ふるさとを想う心」を絵に実現するようになっていった。少年時代からギターでフォークソングを弾き語りする優しい心根をもった作家は、こんどはふるさと白い森の国“おぐに”への想いを具体的に画面に展開していったのである。その画面には当然のように、一触一触の筆のタッチに心が躍り、ドリィーミーに輝くような走る虹のように繊細な光が乱舞していた。かつてモネがフランスの田園から香りや雅びな光の変化の影響を受けて、キャンバス上に印象派の空間を創造したように、“おぐに”への深い想いを重ねて、渡部氏の心象風景が次々と生まれた。この度の個展でその作品16点が“白い森”へと優しくいざなってくれたことは、愛郷心を一段と奮い立たせて頂く意味でも大切な機会となったろう。

実は筆者は数日前までパリにいて、ちょうど世界最大のモネ展をグランパレ美術館で開かれる初日に観たばかりなので、いっそう渡部氏の懐郷の動機を熱く画面に実現した意味がよく判り、郷里の皆さんを感銘に誘ってくれたことが想像できた。

それに加えて、大切なのは親孝行であった渡部氏の作品には、ふるさとの村・沢中の墓地に今も眠る大切な父母への惜別の想いが深く刻み込まれていることであった。常に母堂への追想のこころが、画面に脈々とその涙腺のしたたりがはっきりとうかがえるほどで感心する。

そして、沢山のふるさとへ続く道への写生の心象絵画とともに書き綴った美しい記念出版本『母のこと』がこれを実証しているのでぜひ一読頂きたい。

昨今のわが国では、自分の出自の村や里への愛着も薄れがちである。こんな折に郷里への深い想いの大切さを気付かせてくれた渡部氏の大回顧展は、小国町に大きな影響と感銘を与えてくれたことであろう。

文／長谷川 栄

「春のハーモニー」ミレー友好協会フランス本部展入選　他受賞多数　2005年　F80

「ふるさとの道」第51回ミレー友好協会フランス本部展 審査員特別賞・国内展大阪市長賞　F60

「冬のプレリュード」第50回記念ミレー友好協会フランス本部展ボーモン・ハーグ市長賞
2006年　F30